

【巻頭言】

○
会長退任の挨拶

舘 暲

東京大学



日本バーチャルリアリティ学会（日本VR学会）が発足してはや5年の歳月が流れた。想いおこせば、バーチャルリアリティがIEEE SPECTRUMの表紙を飾り、またバーチャルリアリティの国際会議VRAISが開催されるなど、VRが世界的に学問分野として認知されはじめた1993年、我が国においても、文部省の重点領域研究「人工現実感の基礎的研究」の準備が進められ、「人工現実感」が学問の一つの領域として生まれようとしていた。その息吹のなか、志を同じくするものが数名集まってこの分野を新しい学問分野として確立すべく、学会を創設しようとする機運が高まっていた。実際、「人工現実感」の準備会のあとなど、しばしば、夜遅くまでその議論で盛り上がったことを今でも明確に憶えている。

二年間の準備活動を経て重点領域「人工現実感」が正式に開始されたのが、1995年7月11日（火）であった。その重点領域の全体会議の席上で、当時、「領域代表者」を務めていた私から学会設立の提案を行い、参加された研究者からの強い賛同をいただいたのであった。

それを受けて、第一回の設立準備会がもたれたのが9月22日（金）、その議事録によれば、舘、原島、廣瀬、岩田、福田の5名が集まり、会誌、論文誌、ニューズレター、WEBサイトの設立などに加え、将来は、ぜひともIEEE Trans. on VRをめざすことなどが論議されている。設立総会及び記念講演会を5月27日の好日、東京大学山上会館で行うことを目指し準備することもその時既に予定している。

第二回の準備会は、10月11日（水）に開催し、続いて

第3回と第4回を、それぞれ11月22日（水）と12月5日（火）に開いて、1996年から2001年までのVR学会大会の候補地と大会長候補を論議し内定している。第5回は、12月25日（月）にもたれた。そのころには、メンバーも舘、池井、伊関、岩田、小鹿、佐藤（誠）、下條、竹村、長田、原島、廣瀬と最初の理事会を構成するメンバーに近づいている。なお、この第5回の準備会では、1月29日（月）の学会設立準備会に集まっていた50名を選出している。

1996年1月29日（月）の第6回設立準備会は、拡大準備会で、発起人および賛助会員の検討をおこなった。それに基づき1996年2月20日（火）に発起人打ち合わせ準備会、2月22日（金）発起人打ち合わせ会、3月13日（水）には、バーチャルリアリティ分野の碩学278名を発起人として発起人大会を開催、4月2日（火）岐阜県知事と私との二者頂上会談、4月9日（火）幹事会、5月2日（木）発起人幹事会、5月17日（金）幹事会などと多くの会合が重ねられ、5月27日（月）設立総会の運びとなったのである。

それから、5年の歳月が流れた。バーチャルリアリティは、21世紀のジェネリックテクノロジーの意味合いを持つことから、今後に向けて十分な学問体系を築くことが緊要である。そのために学会の果たす役割はますます大きい。

特に、情報の的確な発信が重要であり、1996年という国内外でも学会としては極めて早い時期からWEBを立ち上げ、e-mailによるニューズレターの会員への配信や連絡

なども行った。今では当たり前になっているそのような新しい試みを、いち早く行うとともに、VR学会に参加する若い研究者が、この学会の場で研究を発表し論文を上梓し活動することにより、それがアカデミックキャリアにつながることを肝要であることから、学術講演会を開催し、論文誌も学会誌とは別に年4回発刊するなど、学会として必要な機能の充実につとめた。

国際会議については、1991年に発足した伝統のあるICAT (International Conference on Virtual Reality and Telexistence) 「人工現実感とテレグジスタンス」国際会議を1997年からVR学会が引き受け、また、今年は、VR学会発足時からの悲願ともいえるIEEE Virtual Reality国際会議を3月に横浜国際平和会議場で成功裏に開催することができた。

当初からの目的の一つでもあった、芸術との融合に関しては、VR文化フォーラムが毎年企画され、年々充実の一途をたどっている。学生対抗手作りバーチャルリアリティコンテストも1997年からVR学会が共催し、その優勝

者や参加者のなかには、今ではVR学会で大活躍している若手研究者も数多く輩出するなど、今後は楽しみになっている。

このように、1999年には、日本学術会議の登録団体として認可され、2001年には、IEEE Virtual Reality国際会議を公式開催し成功するなど、国内的にも国際的にも我が国におけるバーチャルリアリティの正式な学術団体としての認められ、また学会の財政的な基盤も十分に固まってきた。

5年の大きな節目を迎えて、学会はその第二段階への移行が強く望まれる。その一つが、法人化である。法人化によって学会の継続性が保障され、若い会員は安心して、この学問分野に勤しめるのである。しかし、法人化は大変大きな努力を要する事業である。「新しい酒は、新しい皮袋に盛る」の言葉どおり、次の新世代は新しい会長に託すのが最善である。原島新会長のもと、21世紀のさらなるバーチャルリアリティの発展を期待し挨拶に代えたい。

略歴

館 暲 (TACHI, Susumu)

1946年1月1日、東京生まれ。1968年、東京大学工学部計数工学科卒業。1973年、同大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。東京大学助手、通産省機械技術研究所バイオロボティクス課長、マサチューセッツ工科大学(MIT)客員研究員、東京大学先端科学技術研究センター教授などを経て、1994年、東京大学工学部計数工学科教授。現在、同大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻教授。日本バーチャルリアリティ学会初代会長、国際計測連合学会(IMEKO)ロボティクス会議議長、重点領域「人工現実感」領域代表者、CREST「テレグジスタンス」研究代表者などを務める。

ロボット工学、バーチャルリアリティ、システム情報学が専門分野。バイスペクトル、盲導犬ロボット、テレグジスタンス、アールキューブなどの研究を行う。

IEEE、日本ロボット学会、計測自動制御学会、情報処理学会などの学会論文賞、技術賞、科学技術庁長官注目発明などのほか、通産産業大臣賞、IMEKO特別勲功賞などを受賞。著書に、『画像処理とパターン計測技術』(朝倉書店)、『メカトロニクスのはなし』(日刊工業新聞社)、『自然とロボット：盲導犬』(桐原書店)、『バーチャル・テック・ラボ』(工業調査会)、『人工現実感』(日刊工業新聞社)、『人間講座：ロボットから人間を読み解く』(日本放送出版協会)、『バーチャルリアリティの基礎』(培風館)などがある。